

音読指導のABC

いずみ学力研 金井 敬之

んなの前で安心して声を出せぬことです。
たがえそのときばかりまく読めなくとも、
クラスのみなといっしょに声を出せば抵抗は余り多くありません。

ただ、連れ読みは、教師の音が耳に残っていて、声に出しやすい反面、文章を目で追わなくても、声を出すことができます。自分で文章を読んでいくには、しっかりと目で文字を読むことがなによりも大切です。

そのためには、スムーズな眼球運動が必要で、一字ずつを見ないで、多くの字をかたまりで見えるようにするよう、口に出している文字よりも先の字を目で追っていることが大切である。この行為を「目ずらひ」といいます。

「きみたちが歩くとき、足元ばかり見ていませんか。顔を上げて、少し先を見ることが、音読も同じです。今読んでいる文字よりも少し先を見ることが、「目ずらひ」、意識的に練習させます。

この眼球運動は、低学年の時期に発達するといえます。高学年になれば習熟するといは限りません。音読が低学年の主要な課題

連れ読み

私が音読練習でまず取り組むのは、「連れ読み」という音読練習です。

「連れ読み」は、子どもたちに、教科書をスラスラ読ませる有効な手立てです。

連れ読みとは、教師が読んだあとを、子どもが同じように読んでいくという方法です。

「お手紙」(アーノルド・ローベル)を例として説明します。

「先生のあとについて、みんなで読みます」
教師 「がまくんは、ハイ」

子ども 「がまくんは」

教師 「げんかんのまえにすわっていますか」
た。ハイ」

子ども 「げんかんのまえにすわっていますか」
た。「

とじいじつじに読みます。

連れ読みをするとい、子どもたちの読む速

さが、教師の読みより、じいじでも少し遅くなります。「読む速をも、先生と同じにしまじょう」と、読む速さも意識させることいいじょう。

連れ読みの声がいさいときは、次のように言います。

「となりの人の声が聞こえた人」と言って手を挙げさせる。それだけで、クラスの音読の音が大きくなります。

「わらわら」「じなりの人に声が聞こえぬくらいの声で読みまじょう」と言います。

連れ読みがなぜ有効なのでしょう。理由は二つあります。

まず、連れ読みは、文章を短く切って読むので、教師の音が耳に残っています。

教師の音が耳に残っていると、声に出して読みやすいのです。英語のリピーター練習と同じである。これが第一の理由です。

第二の理由は、音読の苦手な子どもも

であるのも、このことが理由です。

一斉めいめい読み

連れ読みの次の音読練習に「一斉めいめい読み」というのがあります。

個人でする音読練習です。

少く声を落として、自分のペースで音読をします。教室が少くくもやかになります。このとき、「音読の苦手な子のそばに行くと、練習を励ましたりする。」

「5回読みます。4回読んだらすわります。5回目にはすわって読みます。」という指示を出します。

子どもたちは、1回目は前を向いて、2回目は右を向いて読みます。3回目は後ろ、4回目は左を向いて読みます。そして、5回目はすわって読ませます。

この方法は、子どもたちに変化を与え、じょうがでいかに、子どもが読むスピードが把握できるようにしようとしてあります。子どもたちは、ゲーム感覚で音読練習ができます。

5回目をすわって読むというのがポイントです。

「4回目を読み終わったらすわります。」

う。「という指示では、本読みの苦手な子は、だんだん立っている子の少なくなった状態で、音読を続けなければなりません。最後には、音読の苦手な子が、たったひとりで声を出して音読をしなければならなくなります。

これは、音読の苦手な子にとっては苦痛です。そのような状態を避けるために、5回目は、すわったままで音読をさせます。4回目が終わって、立っている子がいなくなったら、「やめまじゅう」と終了の指示を出します。5回目の音読は、苦手な子の4回目の音読を抵抗なくさせるための指示なのです。

「5回読みます。」という指示ですが、やはり実は4回の音読練習です。

小さなことかもしれませんが、このような配慮をするのが、「どの子も伸ばす」という学力研の実践だと思っています。

中学年以降、教材文が長くなり、連れ読みを続けると、時間的にも長くなり、練習が単調になることがあります。

そのときは、1ページを連れ読み練習をし、そのあとは、一斉めいめい読みをしま

す。例えば、3分間のめいめい読みをさせて、時間がきたら、自分の教科書に鉛筆でしるしを入れさせます。

翌日の時間に、そこからまた練習を始めます。教材文を読み終わったら、また最初から読ませます。

授業の中で、何度も教材文を読むことが大事だと思っています。

交換読み

子どもたちに好評だった「交換読み」という練習方法を紹介します。

隣同士で教科書を交換します。ジャンケンをして、勝った人から、教科書1ページを読みます。

お互いに、まちがった箇所をチェックする。教科書に戻してもらい、自分がまちがった箇所を確認し、自分の教科書でチェックされた箇所に注意しながら再び練習をします。自分の課題が明らかになるので、練習にも一層力が入ります。

聞き手がいるというところが、子どもたちの意欲を高めますし、一人が読んで、他の子は聞いただけという効率の悪いも解消するようになります。